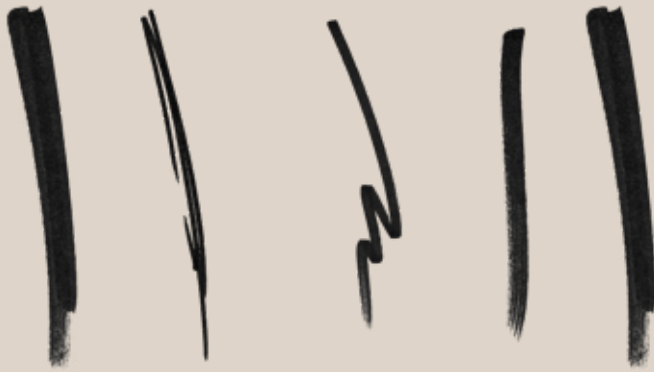


音楽の次の100万年を解く5つの鍵



Roland Lamb

「音楽は、まさに人生
そのものだ。」



– Louis
Armstrong

はじめに	0
本質	1
内側	2
あいだ	3
その先へ	4
自由であること	5

「唯一の真実は、 音楽だ。」



はじめに

私はニューハンプシャーの丘の上に建つ家で育った。音楽と本に囲まれ、毎朝姉三人と両親と一緒にパンを焼く。そんな恵まれた子供時代だった。家にテレビはなかった。あるのはレコードプレーヤーと、父がいつも弾いていた古びたスタインウェイのアップライトピアノだけだった。ときどき一緒に歌い、私たちが寝静まったあとも、父の奏でるジャズの音が通気口を抜けて、木の梁に静かに響いていた。音楽は、家そのものの呼吸だった。

- Jack ⁰⁰ Kerouac

けれど私が4歳のとき、両親は別れ、父は家を出ていった。家は突然沈黙に包まれた。満ちていたはずの空間は空虚と寂しさに満たされた。私はピアノの前に座り、白と黒の鍵盤に隠された「暗号」を解き明かそうとしたがそこに再び命を吹き込むことはできなかった。

それでも、いや、だからこそだろうか。私は何時間も鍵盤の前に座り続けた。ピアノに歌わせたい。その一心で、音の組み合わせを試し、響きを探り、偶然を待った。そしてある日、ひとつの発見をする。1オクターブにある12の音を無造作に鳴らすと不協和音が生まれる。だか5つの黒鍵だけ弾くとなぜか必ず美しく響き合うのだ。後にそれがペンタトニック・スケール、対称的で調和に満ちた音階であることを知る。だがそのときの私にとって、それは理論ではなく、救いだった。

6歳になるころ、私はそこに白鍵をひとつ加えてみた。ド。そしてもうひとつ、ファ。知らぬ間に私は変二長調のスケールを奏でていた。小さな発見だった。けれどその積み重ねが、私の内側に閉じ込められていた音楽を少しずつ解き放っていった。異国の言語のように不

可解だったピアノは、やがて私の“話せる言葉”になっていった。

同じ年、1984年。イタロ・カルヴィーノはチャールズ・エリオット・ノートン詩学講義のために『新千年紀のための六つのメモ』を書いた。しかし彼は、講義を行う前にこの世を去ってしまう。その中で彼は文学が次の千年紀を生き延び、その物語を語り続けるために、どのような価値が必要なのかを、私たちに手渡そうとしていた。

そして2020年、ゲイリー・トムリンソンは、音楽の過去百万年を辿る研究を通して、音楽と言語が共に進化し、人間を“人間たらしめた”根源的な営みであることを示した。

もしそうだとすれば。文学が千年を越えて生き延びるための価値を問うたカルヴィーノと、音楽が人類そのものを形づくったと論じたトムリンソン。

その二つの思索を重ねたとき、私はひとつの問いに辿り着く。音楽は、次の千年において、何になるのか。そして次の百万年において、何へと変容するのか。

私にとって音楽への入口が5つの黒鍵だったように、本稿では5つの鍵を手がかりに、音楽がこれまで何であったのか、いま何であるのか、そしてこれから何になりうるのかを探っていく。

まず「本質 (Essence)」から始める。音楽は私たちの存在の根底にあるものであり、個人的次元、社会的次元、そして普遍的次元をあわせ持つ。

次に「内側 (Within)」へと目を向ける。音楽がどのように私たち自身と私たちを結びつけているのかを考える。

その後、「あいだ (Between)」を見ていく。音楽がどのように他者と私たちを結び、身体的・文化的・社会的な共有された進化の中で私たちをつないできたのかを。

そして最後に「その先 (Beyond)」へ。音楽はそもそもなぜ存在するのか。そしてそれはどのように宇宙と私たちを結びつけているのか。

もし私たちが、自分自身の音楽的未来を意識的に形づくることができるとしたらどうだろう。

“

音楽は、次の千年、そして次の100万年で、どのように変わっていくのだろうか。

”



What will

music

become?

「私たちが音楽を聴くとき、それは過去を聴いているのではなく、未来を聴いているのではない。

私たちは“拡張された現在”を聴いているのだ。」

– Alan
Watts



本質

音楽は、私が16歳になるまで、私の子ども時代における揺るぎない存在だった。だがその年、私はこの世界を捨て、あらゆる世俗的な執着を手放すことを決意した。それはおそらく、自分自身という「言語」を学ぼうとする試みだったのだろう。かつてピアノという異国の言語に分け入ろうとしたように。私はジャズ・ミュージシャンとして成長していた。同時に、哲学や宗教への深い関心を抱き、人生の意味を理解したいという切実な探究心にも突き動かされていた。

“

音楽は、この宇宙における驚異的な特質であり、人間に特有の能力であって、私たちの人間的経験の多くの次元を結び合わせるものだ。

”

17歳のとき、私は頭を剃り、家族に別れを告げ、師が修行した寺、日本でも最も厳しい禅の修行道場のひとつ、安泰寺へと移った。私たちは毎朝3時30分に起床し、自分たちの食べ物を育てるために庭や田んぼでの過酷な労働に長い時間を費やし、さらにそれ以上に長い時間を沈黙の坐禅にあてた。静寂を破るのは、ただ鐘の音だけ。

会話はなく、私物もなく、テクノロジーもない。その肉体的・精神的な厳しさにもかかわらず、私はすべての修行に全身全霊で身を捧げていた。だが、ひとつだけ、どうしても手放せない“世俗とのつながり”があった。

入山前、日本の友人がSONYのミニディスク・プレーヤーをくれた。私は「The Soul of Mbira — Traditions of the Shona People」というアルバムを買っていた。

それを安泰寺に持ち込んだのは、しまい込むつもりだったからだ。けれど、そこに収められた音楽の力に抗うことができなかった。毎晩、僧堂の布団にもぐり込み、こっそりヘッドフォンを差し込み、ショナの人々の音に耳を澄ませた。それは、炎天下の長い一日のあとに飲む、最初の一杯の水のようだった。私はあらゆる世俗的な快楽を手放すことができた。ただひとつ、音楽を除いて。

なぜ音楽は、これほどまでに深い人間的欲求なのだろうか。音楽は根源的に、私たちを自分自身へ、社会へ、そして世界へと結びつけている。

音楽はまた、自分自身とつながるための鍵でもある。音楽が現実のものとなるのは、私たち一人ひとりが主観をもつ存在だからだ。

私たちの心は音楽的であり、私たちの脳は音楽を理解し、そして育まれることで学び、創り出すことができるように進化してきた。音楽の主観的体験は、ひとつの全体として成り立っている。ひとつの音楽の場だけが、ひとつの時間に完全に存在できる。それは、経験というものの内面性そのものに似ている。無関係な2つや3つの音楽が同じ空間で同時に鳴り響けば、それはもはや音楽ではない。

私たちはそれぞれ、音楽との固有の関係を持っている。記憶や体験は、音楽と感情の経験と絡み合いながら織り込まれている。音楽は、文化という重なり合う個々の経験を通して、私たち一人ひとりの中に織り込まれている。これが、音楽の内面的で、感情的で、個人的な性質である。

同時に、音楽は私たちの「あいだ」に生きるもの——すなわち主観的なもの——とつながる鍵でもある。音楽は、この宇宙における驚異的な特質であり、人間に固有の能力であって、私たちの人間的経験の多くの次元を結び合わせる。

哲学的、数学的、心理的、感情的、文学的、身体的、視覚的、聴覚的、物質的——そしてそれ以上の次元を。音楽が私たちを鼓舞するのは、それが人間であるという経験に声を与え、それを主観的に共有可能なかたちにし、文字どおり宇宙的に共鳴させるからだ。そして私たち自身が音楽を学び、奏するとき、私たちは自らの身体を世界と力強く結びつける。私たちは新しい音楽を、新しい音を、新しい可能性を生み出す。私たちの内に生きるもの——喜び、痛み、人間のあらゆる感情の幅——を、他者も感じ、経験できるかたちへと翻訳する。音楽は私たちの指を楽器という物理的世界へとつなぎ、その楽器の音は再び私たちの耳へと戻ってくる。それは強力な深遠な循環である。私たちが練習し、奏で、聴くたびに、その循環は強化され、ますます強くなる。こうして音楽は、人と人のあいだで生き、循環していく。

“

音楽は、この宇宙における驚異的な特質であり、人間に特有の能力であって、私たちの人間的経験の多くの次元を結び合わせるものだ。

”





“

音楽が私たちが鼓舞するのは、それが「人間として生きる」という体験に声を与え、それを他者と分かち合えるかたちにし、さらに世界中で響き合うものにしてくれるからだ。

”

そして最後に、音楽は宇宙の究極的な本質を理解するための鍵でもある。音楽とは、音という物理的な波が、動的に、調和的に、そしてリズムをもって意味ある関係を結びうる可能性そのものである。音楽はあらゆる文化において実践されてきた。そして音と音楽は、ほとんどすべての宗教において重要な役割を担っている。

音楽が存在し得るという事実は、この世界が調和の中で成り立っていることを意味している。2人の人間が音楽の喜びを分かち合えるためには、共鳴や関係性そのものが、物理法則の根源的な特性でなければならない。音楽は多次的である。数学、物理学、神経科学、心理学、そして文化。それらがひとつの言語へと折り重なったもの。そしてこの百万年のあいだ、私たちはある種の恩寵によって、それを理解する力を授かってきた——必ずしも自在に語れるとは限らないにせよ。これが音楽の普遍的な本質である。

ゆえに音楽とは、無限と有限を結ぶものだ。宇宙の普遍的な物理法則と、移ろいやすい私たちの文化的・社会的・個人的な心の論理とをつなぐもの。音楽は、個人的であり、間主観的であり、そして普遍的である。個性。人間性。そして無限。内側。あいだ。そしてその先へ。

「音楽の訓練は、他のどんな手段よりも強力である。なぜなら、リズムとハーモニーは

魂の奥深く秘められた場所へと自然に入り込んでいくからだ。」

-Albert
Einstein



“

音楽とは誰もが理解できる言語だが、実際に話せる人はごくわずかである。

”

安泰寺での修行を終えた後、私は京都へ移り、インド古典音楽を代表する二人の巨匠、ラヴィ・シャンカールとアリ・アクバル・カーンによるデュオ「ジュガルバンディ」を、ひと夏のあいだ毎日聴いて過ごした。その後、フェリーで沖縄へ渡り、西表島という人里離れた熱帯の島の浜辺で暮らし始めた。西表島ではMiniDiscプレーヤーを使うための電気もなく、音楽に触れる唯一の方法は、島の集落まで約10kmを自転車で走り、地元の学校に頼んでピアノを弾かせてもらうことだった。それでも私は音楽が必要だったから、その道のりを週に何度も往復していた。

禅寺で修行していても島にいても、私が求めていたのは、音楽だけがもたらしてくれる独特の高揚感だった。音楽を聴くことは血圧やコルチゾール値を下げ、ドーパミン、セロトニン、エンドルフィンの分泌を高めることが知

られている。そして、音楽を学び、演奏することによる効果は、それよりもはるかに深く、強い。

実際、音楽の学習と演奏は、他のどんな人間活動よりも、認知的・身体的・感情的に、広範で深い恩恵をもたらすことが分かっている。より具体的に言えば、音楽的な演奏には、多様な認知機能の高速な連携と相互作用が含まれる。

拍を刻むこと、予測、短期記憶、長期記憶、身体の協調、固有受容感覚、感覚処理、理論理解、感情、物語性、精緻な運動制御、身振りの制御、表現、聴取と音の処理、集中——そしてそのほか数えきれないほどの精神的・身体的プロセスが、ひとつの演奏が生まれる瞬間にリアルタイムで統合され、均衡を保っているのである。

複数の研究により、音楽の学習が、記憶力、語彙力、空間認知、注意力、そして実行機能の向上と強く関連していることが明らかになっている。さらに、音楽の学習が他のあらゆる学びを活性化することは、多くの研究やメタ分析によって裏づけられている。音楽はまた、幼少期の情動調整において重要な役割を果たす。赤ちゃんや子どもが眠りにつくのを助け、リラックスさせ、複雑な感情と向き合うことを支える。

“

音楽的な活動は脳の大きさと密度を増加させ、さまざまなポジティブな影響をもたらす。

”

音楽の演奏に伴う認知的な複雑さは、ほぼ脳のあらゆる領域を働かせることを意味する。海馬、聴覚皮質、運動皮質、小脳、ベルト野、パラベルト野、前頭前皮質、脳梁、感覚皮質、視覚皮質、側坐核、扁桃体——これらすべてが、音楽を奏でるときに同時に活性化し、相互に結びついている。

その結果、音楽的な演奏は脳の大きさや密度を高め、身体的・精神的健康に幅広く良い影響を与える。

実際に、音楽家の小脳は最大で約5%重くなり、脳梁は最大で約15%密度が高くなり、聴覚皮質の灰白質は最大で130%増加するという研究結果を踏まえると、私たちは次のように強く仮説づけることができる。



すべての健康な人間の脳には、音楽的な情報を処理し、音楽を学び演奏するために必要な機能が備わっている。しかし、多くの人にとって、音楽を演奏できるようになるまでの道のりは、決して直感的とは言えない。そこには、脳が変化し続ける力—可塑性—が求められるからだ。音楽の学習は、脳のさまざまな領域の結びつきを育てていく。左右の脳をつなぐ脳梁がより密になっていくのも、音楽を演奏する際には、右脳と左脳の両方が同時に働き、深く協調するからだ。そして音楽の旅を続けるほど、脳のさまざまな機能と自己とが、より密接に結びついていく。

音楽は、私たちの内なる世界を、驚くほど深く結びつける。私たちの身体の動きは触覚へとつながり、触覚は音へと変わり、そして自ら生み出した音を知覚することで、感情が呼び起こされる。この「意図から行為へ、行為から受容へ、受容から感情へ、そして再び行為へ」と続く循環は、すべてリアルタイムの流れの中で起きている。この循環の中に身を置く時間が長くなるほど、私たちは自分自身とのつながりを、より深く感じるようになる。



“

複数の研究により、音楽の学習が、記憶力、語彙力、空間認知、注意力の向上と強く関連していることが明らかになっている。

”



“

楽器を演奏するという行為は、きわめて人間的な営みである。 ”

楽器を演奏することは、身体、脳、そして人としての存在そのものを総動員する、最も人間らしい活動のひとつだ。そして音楽の旅は、一人ひとりの人生において最も重要な旅のひとつである。しかし、音楽が人生を豊かにする力を持つことは明らかであるにもかかわらず、現実の世界では、音楽はまだまだ多くの制約の中にある。習得の難しい楽器や、社会的な格差、時間やお金といった現実的な制約が、音楽を縛っている。つまり、音楽を理解し演奏する力は、誰もが持っている。問題は、それらをひとつにつなぎ実際の演奏へと結びつけることだ。これは主として社会の問題であり、脳の性質というよりも、音楽的な力を文化や社会の中でどう育てているかに関わっている。

なぜなら、音楽は身振りや身体感覚に根ざした言語だからだ。人間は、周囲の環境からの働きかけを通して、話し言葉を学ぶ能力を持っている（たとえば、親や養育者が日常的に語りかけることによって、母語は自然に身

についていく）。同じように、音楽のような身振りに根ざした言語も、誰もが学ぶ力を持っている。ただし、それを身につけるには、環境からの働きかけが必要になる。

本質的に、音楽は誰もが理解できる言語だが、実際に話せる人はごくわずかである。人類の文明の発展を導いてきた人間の自由という理想は、きわめてシンプルな考えに支えられている。すなわち、誰もが人間としての根源的な可能性を実現する機会と自由を持つべきだということだ。

誰もが音楽を話す力を持っている。だが、その機会がすべての人に与えられているわけではないのだ。いまのところは。

「音楽は道徳の法である。
この世に魂を吹き込み、
精神に翼を授け、
想像力を大空へと
解き放ち、

人生と万物に
魅力と歓びを与える。」



-Plato



あいだ

日本から戻って数年後、私はアーティストになることを決意した。Royal College of Art に入学し、志の高い若いアーティストやデザイナーたち、そして後に私のメンターとなる Ron Arad のような、デザイン界を代表する人物と肩を並べて学ぶことになった。だが、正式な教育をほとんど受けてこなかった私は、どこか場違いな存在でもあった。

そんな気持ちを抱えながら、RCAの学生カフェに置かれていた古いピアノに向かい、ブルースを弾いていたときのことだ。ふと、ひとつの考えが浮かんだ。ブルースでは、黒鍵から隣の白鍵へと指を素早く滑らせることで、音程が揺れ動くような感覚を生み出すことがよくある。

演奏しながら鼻歌を口ずさんでいるうちに、私は、自分がひとつひとつの音を分けて弾くのではなく、それらを滑らかにつながった、ひとつの音として表現したいと願っていること

に気づいた。だが、音が明確に分かれた鍵盤を持つピアノでは、それは叶わない。その違和感が、やがて音楽を「演奏する」だけでなく、「発明する」という方向へと、私を導いていった。それが Seaboard の誕生へとつながり、ROLI を始めることになる。

Seaboard の開発を進める中で、楽器とは人と人とのあいだに存在する文化的な存在であり、共有された身体的な動きや表現を通して、私たちを結びつけるものだということに気づいた。Seaboard が成功した大きな理由のひとつは、ピアノの文化を土台にしていたことだ。ピアノを弾いてきた何百万人もの人々の身体的な記憶と、その音楽文化を活かすことで、新しい可能性が生まれたのだ。

音楽は、私たちを結びつける普遍的な文化の糊のような存在である。私たちがこの世界に意味を見出し、そこに根を下ろして生きるためのあらゆる儀礼や実践において、音楽は重要

“

音楽は、すべての人間のあいだに存在する、普遍的で、永続的で、そして誰もが理解できる言語である。

”

03

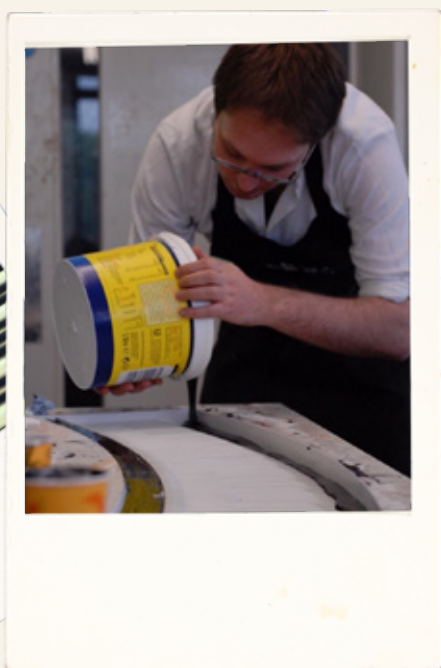
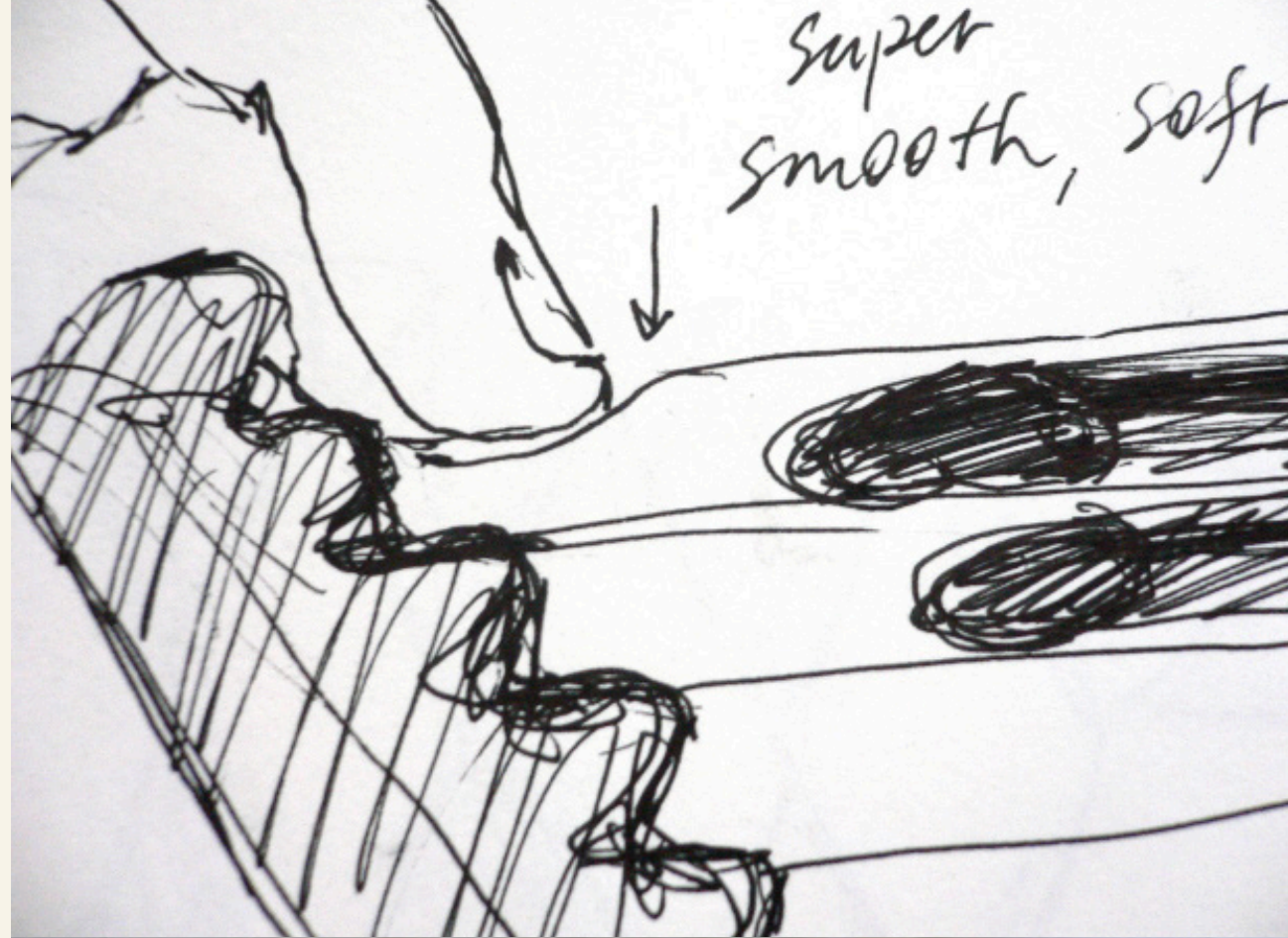
な役割を果たしてきた。主要な宗教のいずれにも、鐘の音や詠唱、歌、朗読といった、何らかのかたちで音楽が組み込まれている。そして現代において、世界を形づくる力をもつ映画は、その感情的な意味を生き生きと伝える音楽によって支えられている。

文化の多くの側面は、本質的に分断されている。言語、宗教、国籍、人種、ジェンダー、そのほかにも数えきれない。しかし、音楽はそうではない。ジャンルは数多く存在するが、どれもが互いにつながっており、感情は隔てなく共有される。音楽は、私たちの人間性そのものである。それは、経験と進化を支える社会的な営みの中に、深く織り込まれている。

禅寺で禁制品のMiniDisk プレーヤーを忍ばせ、遠く離れたアフリカ南部で生まれた音楽

に耳を傾けていたとき、そこに翻訳は必要なかった。その音楽は、私にとって驚くほど身近で、むしろ欠かせないものに感じられた。音楽は、すべての人間のあいだに存在する、普遍的で、永続的で、そして誰もが理解できる言語である。音楽は、私たちが共有された過去へと結びつけ、他のどんな芸術やテクノロジー、メディアにも成しえなにかたちで、私たちには想像以上に共通点があることを感じさせてくれる。

これこそが、音楽のもつ根源的で変革的な力である。他者の感情の響きを自らの内に感じ取ることで、私たちは共有された人間性を体験し、他者とのつながりを実感することができる。



「森の中で木が倒れ、
それを聞く者が誰もい
なかったとしたら、

その音は存在する
のだろうか？」

04



- Zen
Koan



その先へ

Seaboard の構想を得てからの10年間、私は、大きな転落の瀬戸際に立ちながらも、目覚ましい上昇の真っ只中にあるような感覚を抱いていた。世界中のミュージシャンが Seaboard を手に取り、愛用してくれていた。私自身が敬愛してきたアーティストを含む、多くの世界的なアーティストと仕事をし、事業も大きく動き始めていた。

しかし、初めての起業でビジネスのバックグラウンドもなかった私は、複雑な事業を立ち上げ、動かしていくための「言語」を一から学ばなければならなかった。チームや投資家を失望させたくないという思いから、できることはすべてやろうとし、ただひたすら働くことで事態を乗り越えようとしていた。そして年月を重ねるにつれ、忙しいCEOでありまた新米の父親でもあった私は、自分のために、あるいは誰かとともに落ち着いて音楽を奏でる時間を次第に持てなくなっていった。

かつては、西表島でピアノを弾くために、10キロを自転車で走ることも厭わなかった。それなのに、今では本社でピアノまで10歩歩き、10分間弾くための時間すら、なぜか見つけられなくなっていた。それは、胸の奥に鈍い痛みとして感じられた。

パンデミックによって世界が突然止まり、誰もが足止めを余儀なくされた。その静けさの中で、私は再びピアノと向き合うことになった。人けのないオフィスに忍び込み、毎日ピアノと Seaboard を弾いていた。新たな音楽の可能性を探りながら、そもそもなぜ自分が音楽の発明家であり、起業家になろうとしたのかを思い出していた。そしてようやく、子どもたちに音楽を教える機会ができた。新しい世界に出会う子どもたちの驚きを見守ること

は、私にとって人生を変える出来事だった。

今では、子どもたちと毎日音楽を奏でること—レッスンの時間や、家族バンドで Nat King Cole の「L.O.V.E.」を演奏すること、そして一緒に音楽を創ることで生まれる特別な絆—それが、私にとって何よりの喜びになっている

音楽は、私たちを大切な人たちと結びつけてくれる。でもそれだけではない。身近な人間関係や日常の社会の枠を超えた、もっと大きなものと自分がつながっているのだと感じさせてくれる。音楽は、いったいどこから私たちを別世界へと誘う力を得るのだろうか。そもそも、なぜ音楽は存在するのか。なぜこの世界には、音楽を生み出す余地があるのだろうか。

私たちが知り得る世界は、この世界ひとつだけだ。幸いにも、それは音楽の存在する世界でもある。それをどうやって確かめられるのだろうか。音楽とは、リズムとハーモニーに宿る、深い意味のかたちであり、それが私たち一人ひとりに共鳴する。だから私たちは、主観を通してその実在を確かめることができる。つまり音楽は、私たちが感じ取ることで存在する。

音楽との深いつながりが、どのようにして生まれてきたのかを理解するには、音楽の物理的・歴史的・文化的な歩みを見つめる必要がある。そのためには、はじまりへと立ち返らなければならない。

今から約130億年前、ほんの一瞬の出来事としてこの世界は誕生し、私たちがいま生きている世界の、あらゆる可能性がそこに生まれた。それは、まさに「はじまりのはじまり」だった。力強い打音から楽曲が始まる、その瞬間のように。

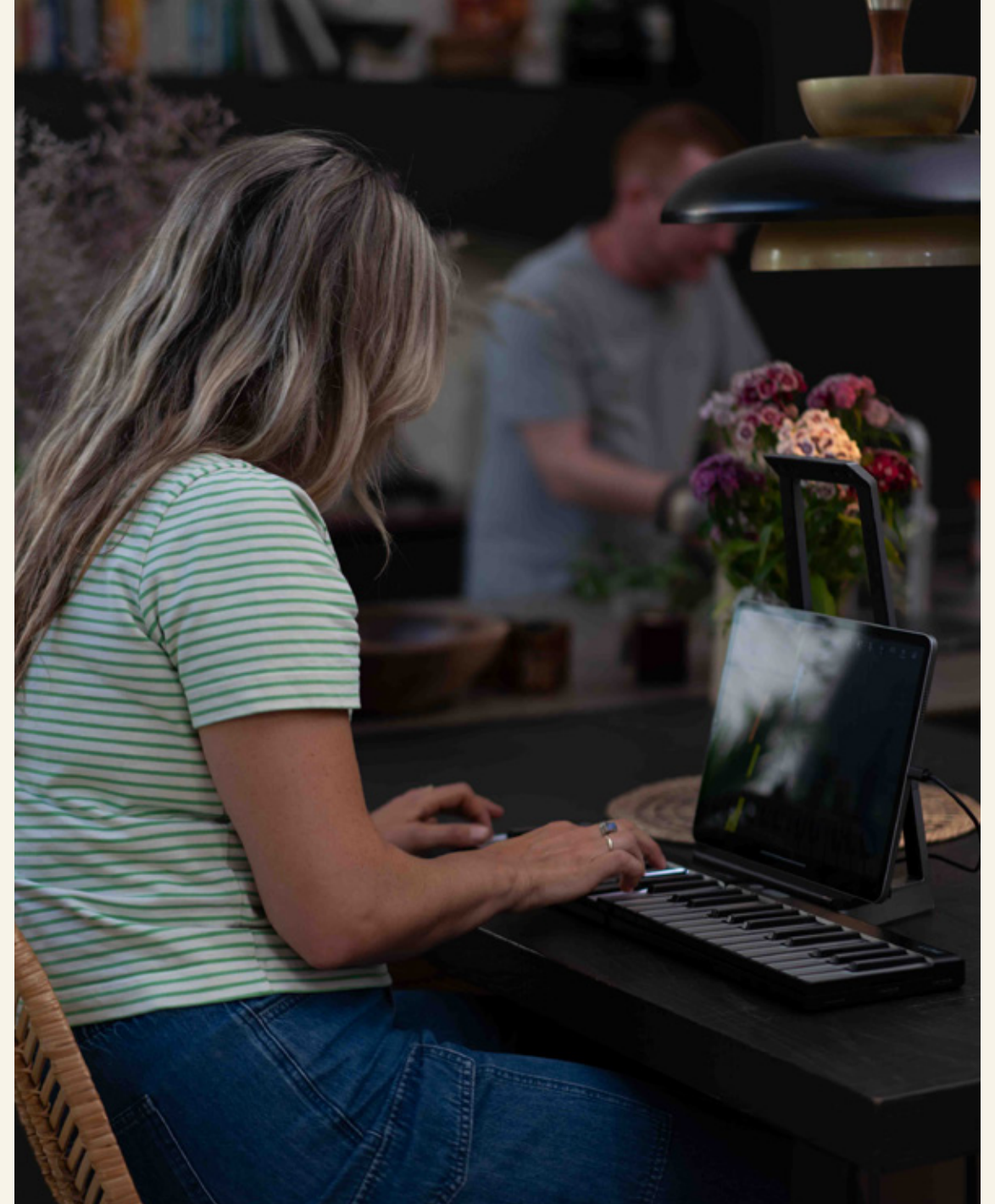
その後の約80億年にわたって、この世界は、熱く、冷たく、元素に満ちた状態を行き来していた。そして大部分は、静寂に包まれていた。やがて、音楽が現れる。

鳥のさえずりがこの世界に現れたのは、わずか6000万年前のことだ。ほどなくして、世界は旋律で満たされていった。呼びかけや音の関係性は、それまでに存在したどんなものよりも、はるかに複雑な音楽的構造を持つようになっていった。

現在の人類学の知見によれば、人類進化の過去600万年は、社会的に森で暮らす霊長類から、地球規模で変化をもたらす知的な種へと、ゆっくりと、そして近年では急速に移行してきた過程だったとされている。進化的にも文化的にも、それは大きな転換の物語である。高度な言語の発達、より洗練された社会構造、そして道具の使用は、脳の大きさと密度が飛躍的に高まる大きな原動力となった。

言語を通して複雑な意思疎通が可能になったことで、私たちはより高度な社会構造を築き、さまざまな能力を発揮できるようになった。やがて、人類以前の社会は、言語や動き、音、踊り、そして音楽によって、人と人とを結ぶ儀礼を育てていった。

こうして音楽は、小さな集団の中でゆっくりと進化していった。母親が赤ん坊を眠らせるために歌う子守歌や、人々が集う儀礼の中で、音楽は次第に、人間性を織りなす布地の一部となっていった。私たちの経験や意味の世界に、共鳴や感情を吹き込み、それを他者と分かち合えるものとして。





楽器の力を考えるうえで、私たちの脳が、言語と道具の使用を通して進化してきたことは重要な前提となる。私たちの脳は、音や意味を理解するための高度な処理能力を発達させてきた。同時に、筋肉の記憶や自己受容感覚、感覚知覚、巧緻な運動制御など、一見ばらばらに思える働きを結びつける力も育んできた。楽器を演奏するとき、私たちは他のどんな活動よりも多くの脳の働きを同時に使っている。そしてその多くは、音楽とともに歩んできた人類の進化の過程の中で育まれてきたものだ。これは、音楽を学び、奏でることが、脳の健康にとってなぜこれほど重要なのかを示す、もうひとつの手がかりでもある。

“

音楽は、私たちが大切な人たちと結びつけるだけでなく、身近な世界を超えた、より大きなものとのつながりを感じさせてくれる。

”

だから音楽は、文字通り私たちの内側で共鳴している。それは私たちの一部であり、音楽が私たちが形づくってきたからにほかならない。私たちの心は、自分自身と他者とのあいだで生まれる、音楽的でリズムカルな経験—幼いころに刻まれる重なり合うリズムによって形づくられてきた。音楽のこの内なる共鳴は、世界に遍在する「反復」という根源的なパターンに由来している。波は、山と谷という形を繰り返す現象だ。惑星は、わずかな変化を伴いながら、何十億年にもわたって太陽の周りを巡り続けている。進化とは、変

異を伴いながらDNAが繰り返される過程である。

音楽の根本的な論理は、あらゆる関係性に通じている。だからこそ、音楽そのものは、無限で包摂的な性質を持っている。音楽の普遍性が私たちの魂を養うのは、人間の内側、あいだ、そしてその先にまで広がる、深いつながりの世界があり得ることを示してくれるからだ。それは、しばしば痛みや断絶に満ちた現在を生きる私たちに、支えと希望を与えてくれる。

「音楽の流れを止めることは、
時間そのものを止めることに
等しい。

それは、信じがたく、
想像すらできないことだ。」

あなたはいま、ここにいる

– Aaron
Copland



自由であること

音楽は、私の人生を貫いてきた「つながり」そのものだった。母の心音を耳にしていた胎内の記憶から、幼少期の家の床板越しに聴こえてきた、父のピアノの音。ピアノの秘密をひとつずつ解き明かしていった日々、禅寺で静まり返った夜に布団の中へ身を潜め、音楽に耳を澄ませていた時間。人里離れた島でピアノを弾いた経験、そして最終的には、この特別な贈り物を、できるだけ多くの人に届けるための楽器を生み出すことへ繋がった。音楽は、体験として、対話として、そして感情として、私の人生を編み上げてきた力強い糸であり、同時に私の人生を他者の人生と結びつ

けてきた存在でもある。浮き沈みの中にあっても、音楽は、私に最も深い喜びと自由を与えてくれた存在だった。そして何よりも、私をもっとも「人間らしく」感じさせてくれたものでもある。

私自身、そして多くの人にとって、音楽は大きく2つに分けることができる。それは、「聴くこと」と「つくること」だ。しかし、音楽のもっとも原初的なかたちにおいては、この2つのあいだに明確な境界はなかった。音楽を奏でることは、社会的な営みであり、人々が分かち合う活動だった。焚き火を囲み、平原や森の中で、私たちは共に歌い、呼びかけ、応え合い、物語を語ってきた。そうした中で私たちは、感情を込めて自分を表現することを学び、音程を身につけ、他者の感情を感じ取る力を育んできた。

“

すべてが可能な世界において、
想像力こそがすべてである。

”

人類学者たちは、狩猟採集民が週に20時間ほどしか働かず、豊富にあった余暇の多くを、歌い、作曲し、何かを創り出すことに費やしていたと考えている。そうして私たちは物語を語る存在となり、音楽性は信仰や儀礼の中に深く染み込んでいった。実際、私たちが最も人間らしい特性と考えているもののうち、少なくとも2つ「言語と共感」は、音楽とともに進化してきたのである。

“

適切に設計されたデジタル楽器は、新たなグローバルな音楽のエコシステムの中で、私たちをつなぐことができる。

”

今から4~5万年前、人類は最初の太鼓や骨製の笛といった、道具としての楽器を作り始めた。それらは、移動を前提とした生活に適した、小さく持ち運びのできる楽器だった。およそ1万年前、農耕が始まり、それに伴って労働の分業が進むと、楽器は発展し、多様化し、豊かな広がりを見せていった。より高度な専門性を必要とする楽器が生まれ、音楽において「つくること」と「聴くこと」は、次第に分かれていった。それでもなお、私たちの楽器は、人類の進化的な起源との強い結びつきを保ち続けてきた。楽器の系譜は驚くほど限られており、現代の多くの楽器は、こうした最初の祖先に直接さかのぼることができる。そして音楽は、数学や宗教、さらには大聖堂の建築に至るまで、人間社会のさまざまな側面において、重要な役割を果たし続けてきた。



音楽の近代史における最も大きな出来事は、いずれも1870年代に起こった。1877年、エジソンの蓄音機によって音楽の録音が可能になり、「つくること」と「聴くこと」は決定的に切り離された。その影響はきわめて根本的で、過去140年にわたり音楽の社会的な意味そのものを変えてきた。そしていま、その変化は収束と再編の局面を迎えつつある。録音からレコード、カセットテープ、CD、そしてストリーミングへと形を変えながら、今や、数十億のデバイスから誰もがアクセスできる、グローバルな音楽ライブラリとなった。

電子的な音源をもつ最初の楽器「ミュージカル・テレグラフ」は、蓄音機に先立つ1874年、イライシャ・グレイによって発明された。しかし、録音に比べて音楽を「つくる」ことははるかに複雑であるため、電子音楽の進化はずっと緩やかなものとなった。アコースティック楽器は今も根強く使われている一方で、電子楽器は長らく一面的な表現にとどまり、過去200万年にわたって音楽の中心にあった人間の声のような表現力を、十分に生み出すことができてこなかった。

一方でここ数年、人間の表現や関わり方の多くの領域は、デジタルによって根本から変化してきた。たとえば、文章を書くことや写真を撮ることといった創造的な自己表現の私たちは、決定的な変化を遂げている。画像やテキストをつくり、投稿し、共有することは、かつてとは比べものにならないほど容易になった。その結果、それらはソーシャルプラットフォームの中核となり、私たちのオンラインでの営みは、主に言葉と画像、そしていまでは動画を通して行われている。

それにもかかわらず、アコースティック楽器は今もなお昔と同じように習得が難しいまままだ。その結果、伝統的な楽器は徐々に衰退しつつある。パンデミック期を除けば、過去20年にわたり、伝統的な楽器への支出は毎年減少してきた。それでも急激に落ち込んでいないのは、人々がどれほど音楽を愛しているかの証でもある。

では、これから何が起こるのか。大きく三つの可能性がある。

- (a) 音楽をつくる行為そのものの終焉
- (b) AIによる音楽
- (c) 新しい楽器のエコシステムの誕生

私は、(c) に賭ける。



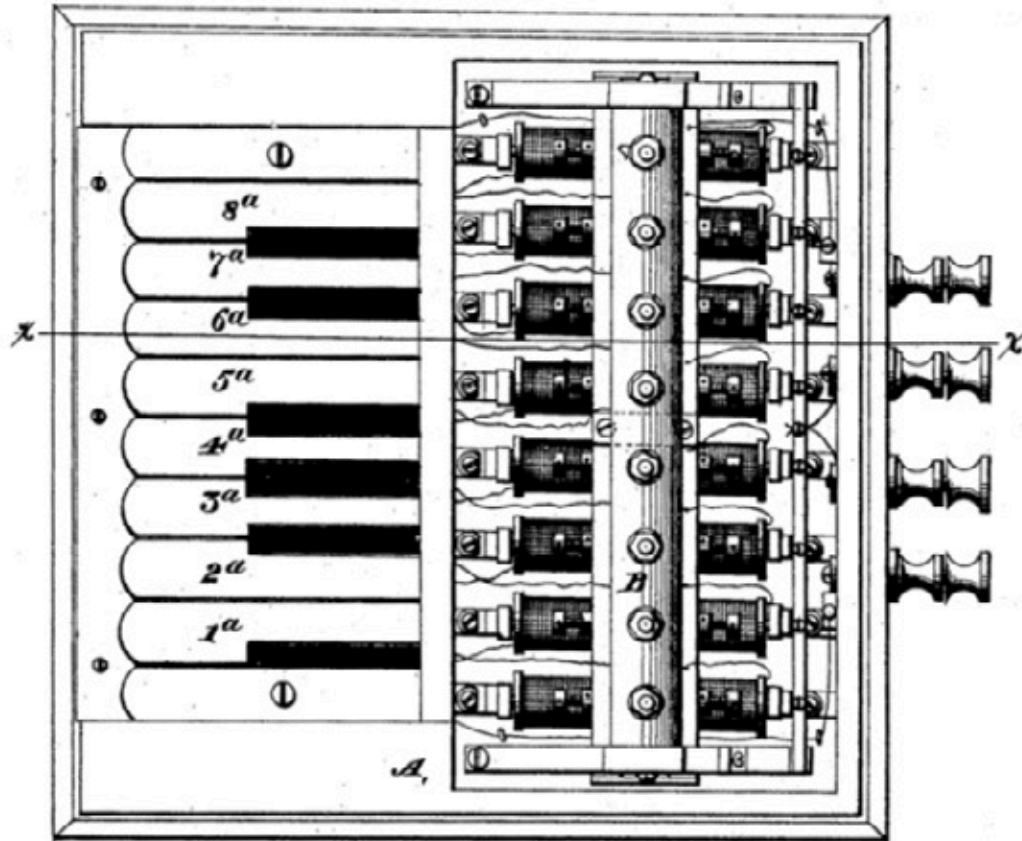
E. GRAY.

ELECTRO-HARMONIC TELEGRAPH.

No. 173,618.

Patented Feb. 15, 1876.

Fig. 1.



音楽をつくることが消えることはない。物語を語り、感情を分かち合い、音楽を通して世界を新たに体験したいという衝動は、私たちの経験にとってあまりにも本質的だからだ。音楽を失えば、時代精神はその「精神」を失い、私たちは沈黙か、過去の残響の中に閉じ込められてしまうだろう。AIは今後、人間がつくった音楽と見分けがつかない音楽を、ますます生み出せるようになるだろう。音楽は、私たちの人間性を形づくる、言語的・文化的・社会的なやりとりと、深く結びついている。AIが、人間と同等、あるいはそれ以上に洗練された文章を生み出せるようになったとしても、私たちは話すことをやめない。それと同じように、音楽をつくることをAIに委ねることもないだろう。音楽はきわめて主観的な営みであるがゆえに、演奏者と聴き手、あるいは人と人とのあいだで交わされる音楽的な呼びかけと応答という社会的体験が、近い将来に失われることはない。



あらゆることが可能な世界では、想像力こそがすべてだ。そして私たちは、まさにあらゆることが可能になる世界に生きている。私たちはいま、大きな転換点に差しかかっている。テクノロジーは生活のあらゆる側面に及び、かつては想像すらできなかったことまで含めて、私たちにできることの大半を再現できるようになってきている。だからこそ、私たちはできる限り大きな夢を描かなければならない。

びやすく、それでいて比類のない表現の深さを備えるだろう。それらは、美しく、有機的な存在となる。持ち運びやすく、直感的で、多用途。誰もが、どこにいても、表現豊かな音楽をすばやく生み出し、無数の可能性の中で共有できるようになる。

正しく設計されたデジタル楽器は、新たなグローバルな音楽のエコシステムの中で、私たちを結びつけることができる。

それこそが、私たちの望む未来ではないだろうか。そして、デジタルネットワークを通じてグローバルにつながるこれらの楽器の登場は、音楽をその原点へと立ち返らせるかもしれない。「つくること」と「聴くこと」の境界は次第に溶け合い、音楽は再び、コミュニケーションや物語として、私たち一人ひとりがそれぞれので織り上げていく社会的な布地となるだろう。

これまでの形で発展してきた電子楽器は、長くは残らないだろう。それらは、生まれながらにデジタルである新世代の楽器へと置き換わっていく。それらは、ひとつのデバイスから、アコースティック楽器が持つあらゆる可能性とダイナミクスを提供する。驚くほど学

私たちは、止めることのできない速度でホモ・デジタルスになりつつある。さあ、ホモ・ムジカリス (homo musicalis) になろう。

WITNESSES
Wm. J. Payson.
J. Mich.

Elisha Gray INVENTOR

By his Attorney
Wm. Baldwin



楽器が、知性をもつ存在である世界を想像してみしてほしい。私たちは楽器を通して語りかけるだけでなく、楽器と対話することもできる。楽器は私たちのために音を奏でるだけでなく、私たちの話を聞き、教え、励まし、どうすればよいのかを示してくれる。あなたのニーズや意図を理解し、音楽家としてのあなた自身を最大限に引き出してくれる楽器を想像してみしてほしい。ビバップを学びたいと言えば、オフビートでどう方向転換すればいいのかを教えてくれる。コードの置き換えを探していれば、新しいアイデアを提案してくれる。

楽器を学ぶには、よほど恵まれた人でない限り、音楽に詳しい親や教師、あるいは少なくとも音楽仲間が必要になる。もし楽器そのものが私たちを理解し、支え、誰一人取り残さない音楽の未来を可能にするとしたら、どうだろうか。

音楽的な知性がいま始まり、10年後に最初の成熟段階を迎えるとしたら、その先の100万年はどうなるのだろうか。楽器は、より賢く、より深く、より洗練された存在へと進化していく。人間に求められる労働は次第に減り、私たちは「つながり」を感じる体験に、より多くの時間を費やせるようになる。そして、音楽と一緒に奏でることほど強いつながりを生み出すものはない。

音楽的知性の進化に、100万年もかかることはない。技術の進歩の速度を考えれば、最初の意味ある成熟段階に到達するまで、10年すらかからないかもしれない。ウィリアム・ギブスンの言葉を借りれば、「未来はすでにここにある。ただ、均等に行き渡っていないだけだ」。ある人は前工業化の世界に生き、

別の人は情報時代に生き、さらに別の人は相互作用の時代の始まりを体験している。相互作用の時代の次に訪れるのは、想像力の時代だ。それは、断片的な情報から、つながりとしての相互作用へ、そして想像力による全体的な体験へと進む、自然な進化の流れである。誰もが音楽を語れる想像力の時代を生きることは、文字どおり、そして比喩的にも、世界的な調和へと私たちを導いていくだろう。

音楽を奏でることは、誰もが享受するに値し、誰にでもでき、そして誰もが望んでいることだ。それにもかかわらず、実際にそれを楽しめる機会を持つ人は、ほんの一部に限られている。誰もが音楽を話せる世界を想像してみしてほしい。人々が協働し、分かち合い、自分自身の音を生み出せる世界を。音楽を創る人になることは、いま写真家や動画クリエイターになるのと同じくらい当たり前になるだろう。

How?

音楽が持つ計り知れない力に、世界はまだ十分に目覚めていない。そのため、私たちが能動的に音楽と戯れる力は、長く制限されてきた。音楽は、誰もが理解できる普遍的な言語だが、実際に話せる人はごくわずかだ。それを、変えていこう。

音楽は、すべての人とすべてのものの内に、あいだに、そしてその先に生きている。しかし時に人生が本来もっている音楽性は、私たちの限られた視点や、時代遅れの道具やテクノロジー、見誤った価値観、そして精神的・感情的・内面的な制約の中に、閉じ込められてしまうことがある。そこで、私はひとつの、とてもシンプルな考えに行き着いた。

音楽を解き放とう。

個人的には、私はいまも人生の意味を、そして鍵盤の中に潜むパターンを探し続けている。ただ最近はその「意味」を探す旅であると同時に、「音楽」を探す旅でもあるのだと感じ始めている。ある意味で、宇宙全体はハーモニーとリズム、そしてダイナミクスをもって、ひとつの音楽を奏でている。私の心と人生の音楽は、その普遍的な交響曲の一部であり、同時にそれ自体がひとつの世界でもある。あなたの心の音楽も同じだ。人生をより音楽的なものにする事で、私たちは人生そのものを、より良いものにしていける。



Free

the

music

この本を読み終えたら、音楽が大好きな
友だちにぜひ渡してほしい。



ローランド・ラム (Roland Lamb) は、発明家、デザイナーであり、ROLIの共同創業者。幼少期を米国ニューハンプシャー州の農村部でホームスクーリングにより過ごした後、イギリス・サフォークにある実験的教育機関サマーヒル・スクールに進学。11歳で初めての事業「Jazz Cafe」を立ち上げた。17歳で日本に渡り、兵庫県・安泰寺にて、約1年間禅の修行を積んだ。その後、学業に復帰することを決意し、ハーバード大学にて中国古典哲学およびサンスクリット哲学の学位を取得。さらにロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) にてプロダクトデザインの博士号 (PhD) を取得している。2010年よりROLIのCEOを務め、「Seaboard」、「Blocks」、「ROLI Piano」など、数々の受賞歴を持つ革新的な音楽製品の開発・デザインを手がけている。現在は、ロンドンに家族と暮らしている。

音楽を解き放ち、 次へつなごう。

ご意見やアイデア、「音楽を解き放つ」ための提案などがあれば、ぜひCEO@ROLI.com までお寄せください。すべてのメッセージにお返事はできないかもしれませんが、いただいた内容は必ずひとつひとつ丁寧に目を通します。